

報告タイトル（＊日本語と英語両方ご記入ください）

学術文献にみるグローバルサウスと日本
——見掛けの複雑さに付き合う概念装置としての「第三空間」——

Global South and Japan in Academic Discourse:
Thirdspace as a Conceptual Apparatus for Engaging with Apparent Complexity

氏名（所属）

汪 牧耘（東京大学）
WANG Muyun (University of Tokyo)

要旨（800 字程度）

近年、学術文献における「グローバルサウス」(GS)という言葉の使用は急増している。しかし、GS の意味は自明ではなく、使われ方は著者によって異なる。本報告は、GS が用いられてきた多様な文脈を分析・類型化することを通じて、日本におけるGS 言説を批判的に分析するための土台を提供することを目的とする。具体的には、Web of Science において“Global South”と“Japan”をトピックとする 65 本の文献を対象に、①GS を取り上げる理由、②GS の定義、③日本の位置付けという3つの作業的問いから分析を行った。

調査結果に基づき、本報告はこれらの文献が GS を取り上げる目的を「情勢分析型」「課題解決型」「構造批判型」という3つの理念型に分類した。「情勢分析型」は、地政学的視座からGS を「新興勢力」と「途上国」の集合として定義し、日本の国家戦略の対象として位置付ける。「課題解決型」は、GS を資源不足や制度不備といった固有の開発課題を抱える地域でありながらも、気候変動をはじめとする地球規模の課題解決にあたって不可欠なアクターとして捉える。そして、「構造批判型」は、GS を、植民地主義や帝国主義に端を発する政治・経済・認識上の構造的不平等の産物として位置付ける傾向がある。他方、3つの理念型をまたがりながら、GS の境界を描き直し、それを相対化する研究アプローチも複数ある。

以上の調査結果は、学術文献が GS 概念を道具的に採用してきた側面を浮き彫りしている。GS の意味は、一見複雑であるものの、論者の棲み分けによって互いに対決・対話がないまま、データベースに雑居している状況に留まっている。本報告はこうした状況を研究の再帰性を促す知財へと転換するため、「第三空間」(thirdspace)の理論を援用し、GS 概念の再構築を提言する。「第三空間」としてのGS は、特定の研究目的による概念の断片的利用を自覚させ、さらに他分野との接触・変容を媒介するという意味で有益である。それは、日本とGS の関係を特定の立場による解釈から解き放ち、多元・多層にわたる世界の絡み合いを想像する概念装置にもなりうる。

キーワード： グローバルサウス、日本、学術文献、第三空間、言説分析